

## 浅井山公園と温故井池

熊澤 良嗣 調

浅井山公園は昭和40年に開園した。公園の敷地は、いずれも東浅井の字<sup>げにかめ</sup>銭瓶と字下之瀬にまたがっている。面積は3.5ha以上あるが、その大半は池である。大江川に近い西の方の一部は浅井町西浅井に属する。

近隣では「浅井の池」、「浅井の大池」と呼ばれているが、「<sup>あんどいけ</sup>温故井池」という名前も付いている。一宮市によって公園化されるまでは、ずっと昔から、この池は<sup>もりりんべい</sup>森林平家の所有物であった。更にそれより以前は、瀬部中島の字富士下に下屋敷があったという尾張藩重臣阿部<sup>いわみのかみ</sup>石見守の支配地であった。

池が森家の所有になったいきさつは、概略次の通りである。

<sup>げんじ</sup>元治元年（1864）、尾張藩主徳川<sup>げんどう</sup>玄同公が落馬して負傷されたことがあった。整骨医として名高い6世森林平が招かれて治療に当たったところ、怪我は見事に完治した。玄同公は、その礼として浅井川（現日光川）筋の池沼と葎原約3町歩を林平に下賜された。ここは「お止め川」といって、庶民が勝手に魚を捕ってはいけない水域だった。

更に玄同公は林平の整骨術にいたく感激し、藩のお抱え力士だった境川に、林平が使った<sup>こうやく</sup>万金膏を与えられた。薬効あって、境川は大関 当時の相撲は大関が最高位だったといわれる にまで出世した。

このことから、江戸相撲（<sup>えごういん</sup>両国回向院相撲）の力士の間にも林平と万金膏の名前が知れ渡り、怪我の治療のため、はるばる浅井まで力士が訪れるようになった。相撲好きだった林平は無料で彼らを泊め治療してやったという。お相撲さんの碑が隣の<sup>ちようせいじ</sup>長誓寺入口に建っているが、多くの力士がこの地にやってきた過去の歴史を物語っている。（参考までに述べ

ると、両国回向院にも江戸相撲の歴史を物語る「力塚」の碑が建っている。）

かつて「浅井山」と言えば、池から南と東へ、時之島村・瀬部村の境まで続く広大な松林のことだった。コナラ・クヌギなどの落葉樹が混じり、池に落ち込む丘陵にはカエデや榎なども茂り、四季折々の自然の変化が美しい里山であった。文化活動（謡や詩歌）にも熱心だった森家は、池に緋鯉を放ち、小舟を浮かべて客人を楽しませた。

戦後昭和30年過ぎまで浅井山一帯には豊かな自然が残っていた。池面の大半は菱藻<sup>ひしも</sup>で被われ、野鳥や珍しいトンボがたわむれていた。丘陵の池端で静かに釣りを楽しむ人、写生や遠足にやってきた小学生たちの姿が見られた。丹羽へ通じる温故井橋の北のたもとには東屋風<sup>あずまや</sup>の建物があった。

森與司夫氏の「浅井古今百話」によると、ここに「池辺亭」というお茶屋が昭和9年まで建っていたという。林平さんに来院する患者が下宿を兼ねて利用する店で、表側はお茶屋で、奥の家は池端に建てられ下宿になっていた。林平家の持ち家で、いつも大繁盛だったという。特筆すべきは、この下宿は、家の中からも魚釣りができたことだ。

こういった浅井山も次第に手入れが行き届かなくなり、公園として保存する話が持ち上がり、森家の池は昭和37年に一宮市へ寄付された。市は周辺の土地を買い足し、公園の整備をおこなって昭和40年に「浅井山公園」として開園した。

きれいに公園化されたのは良かったが、大規模な護岸工事によって、水際まで近寄ることが可能だった池の水面が離れてしまったことや、中央部にできた渡り橋によって、広々としていた池の眺望が損なわれてしまったのは残念なことである。

特に、年月と共に水質の悪化が目立つようになったことは、池が主役である公園にとつ

ては大変に残念な現象だった。その後平成10年から、かつて生えていたヨシ・マコモ・ガマなどの水生植物を使い、植生護岸や人口浮島を造成するなどして、水質浄化の努力が払われているのは嬉しいことである。

最後に、「温故井」という名前の由来について考察しておきたい。

古来浅井神社の境内にあったとされる名水 人工の井戸ではなくて、自然に湧いていた泉であろうか を「温故井」と呼んでいたという解説をよく目にするが、誰がそう名づけたのか、いつ頃からそう呼ばれていたのかという記述がまったく見られない。名水すなわち「温故井」というものが、歴史の最初からあったとしている。

もう一つの説は、浅井神社の境内にあったとされる名泉の水脈を探り、江戸時代享保の頃に、森家が屋敷内に井戸を掘ったというものである。森家はこれに「温故井」という名前をつけて愛用したという。実際に地元では、森家の屋敷内中に「温故井」があると言われている。

文化活動にも熱心だった森家の人たちは、丹羽の有隣舎と交流があり、漢学の泰斗である鷲津益斎を招いて歓談することもあったようだから、論語の「温故知新」が話題に登場したこともあっただろうと思われる。

<参考文献：一宮市浅井町史、浅井風物考、浅井古今百話>